

芥川龍之介

六の宮の姫君

六の宮の姫君

一

六の宮の姫君の父は、古い宮腹みやばらの生れだった。が、時勢せいにも遅れ勝ちな、昔むかし氣質かたぎの人だったから、官も兵部ひょうぶ大輔たいふより昇あらなかつた。姫君はそう云う父母ちちははと一しよに、六の宮のほとりにある、木高い屋形やかたに住すまっていた。六の宮の姫君と云うのは、その土地の名前に拠よつたのだつた。

父母は姫君を寵愛した。しかしやはり昔風に、進んでは誰にもめあわせなかつた。誰か云い寄る人があればと、心待ちに待つばかりだつた。姫君も父母の教え通り、つましい朝夕を送っていた。それは悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯だつた。が、世間見ずの姫君は、格別不満も感じなかつた。「父母さえ達者でいてくれれば好い。」——姫君はそう思っていた。

古い池に枝垂しだれた桜は、年毎に乏しい花を開いた。その内に姫君も何時いつの間にか、大人寂おとなさびた美しさを具え出した。が、頼みに思った父は、年頃酒を過ごした為に、

突然故人になってしまった。のみならず母も半年ほどの内に、返らない歎きを重ねた揚句、とうとう父の跡を追って行った。姫君は悲しいと云うよりも、途方に暮れずにはいられなかった。実際ふところ子の姫君にはたった一人の乳母の外に、たよるものは何もないのだった。

乳母はけなげにも姫君の為に、骨身を惜まず働き続けた。が、家に持ち伝えた螺鈿らでんの手筥てぼこや白がねの香炉は、何時か一つずつ失われて行った。と同時に召使いの男女も、誰からか暇をとり始めた。姫君にも暮らしの辛い事つらは、だんだんはつきりわかるようになった。しかしそれ

をどうする事も、姫君の力には及ばなかった。姫君は寂しい屋形の対たいに、やはり昔と少しも変わらず、琴を引いたり歌を詠んだり、単調な遊びを繰返していた。

すると或秋の夕ぐれ、乳母は姫君の前へ出ると、考え考えこんな事を云った。

「甥の法師の頼みますには、丹波の前司ぜんじなにがしの殿が、あなた様に会わせて頂きたいとか申して居るそうでございます。前司はかたちも美しい上、心ばえも善いそずりよううでございますし、前司の父も受領とは申せ、近いかんだちめ上達部の子でもございますから、お会いになつては如何でござ

いましよう？ かように心細い暮しをなさいますよりも、少しは益ましかと存じます。……」

姫君は忍び音ねに泣き初めた。その男に肌身を任せるのは、不如意な暮しを扶たすける為に、体を売るのも同様だった。勿論それも世の中には多いと云う事は承知していた。が、現在そうなって見ると、悲しさは又格別だった。姫君は乳母と向き合った儘、葛くずの葉を吹き返す風の中に、何時までも袖を顔にしていた。……

しかし姫君は何時の間にか、夜毎に男と会うようになった。男は乳母の言葉通りやさしい心の持ち主だった。顔かたちもさすがにみやびていた。その上姫君の美しさに、何も彼も忘れていた事かは、殆ほとんど誰の目にも明らかだった。姫君も勿論この男に、悪い心は持たなかった。時には頼もしいと思う事もあった。が、蝶ちようとり鳥の几帳きちようを立てた陰に、燈台の光を眩しがりながら、男と二人むつびあう時にも、嬉しいとは一夜も思わなかった。

その内に屋形は少しずつ、花やかな空気を加え初めた。黒棚や簾すだれも新たにになり、召使いの数も殖ふえたのだった。乳母は勿論以前よりも、活いき活きと暮しを取りまかなった。しかし姫君はそう云う変化も、寂しそうに見ているばかりだった。

或時雨しぐれの渡った夜、男は姫君と酒を酌みながら、丹波の国にあつたと云う、気味の悪い話をした。出雲路へ下る旅人が大江山の麓に宿を借りた。宿の妻は丁度その夜、無事に女の子を産み落した。すると旅人は生家うぶやの中から、何とも知れぬ大男が、急ぎ足に外へ出て来るのを見た。

大男は唯「年は八歳、命は自害」と云い捨てたなり、忽ち何処かへ消えてしまった。旅人はそれから九年目に、今度は京へ上る途中、同じ家に宿って見た。所が實際女の子は、八つの年に變死していた。しかも木から落ちた拍子に、鎌を喉へ突き立てていた。——話は大体こう云うのだった。姫君はそれを聞いた時に、宿命のせんなさに脅おびやされた。その女の子に比べれば、この男を頼みに暮しているのは、まだしも仕合せに違いなかった。「なりゆきに任せる外はない。」——姫君はそう思いながら、顔だけはあでやかにほほ笑んでいた。

屋形の軒に当った松は、何度も雪に枝を折られた。姫君は昼は昔のように、琴を引いたり双六すごろくを打つたりした。夜は男と一つ褥しとねに、水鳥の池に下りる音を聞いた。それは悲しみも少いと同時に、喜びも少い朝夕だった。が、姫君は不相変あいかわらず、この懶ものうい安らかさの中に、はかない満足を見出していた。

しかしその安らかさも、思いの外急ほかに尽きる時が来た。やっと春の返った或夜、男は姫君と二人になると、「そなたに会うのも今宵ぎりじや」と、云い悪にくそうに口を切った。男の父は今度の除目じもくに、陸奥むつの守かみに任せられた。

男もその為に雪の深い奥へ、一しよに下らねばならなかった。勿論姫君と別れるのは、何よりも男には悲しかった。が、姫君を妻にしたのは、父にも隠していたのだから、今更打ち明ける事は出来でき悪にくかった。男はため息をつきながら、長々とそう云う事情を話した。

「しかし五年たてば任終にんはてじゃ。その時を楽しみに待ってたもれ。」

姫君はもう泣き伏していた。たとい恋しいとは思わぬまでも、頼みにした男と別れるのは、言葉には尽せない悲しさだった。男は姫君の背を撫でては、いろいろ慰め

たり励ましたりした。が、これも二言目には、涙に声を曇らせるのだった。

其処へ何も知らない乳母は、年の若い女房たちと、銚子ちょうしや高坏たかつぎを運んで来た。古い池に枝垂しだれれた桜も、蕾を持つた事を話しながら。……

三

六年目の春は返って来た。が、奥へ下った男は、遂に都へは帰らなかった。その間に召使いは一人も残らず、

ちりじりに何処かへ立ち退のいてしまふし、姫君の住んで
 いた東の対たいも或年の大風に倒れてしまつた。姫君はそれ
 以来乳母と一しよに侍さむらいの廊ほそどのを住居すまいにしていた。其処
 は住居と云うものの、手狭でもあれば住み荒してもあり、
 僅あめつゆに雨露しの凌しのげるだけだつた。乳母はこの廊ほそどのへ移つた
 当座、いたわしい姫君の姿を見ると、涙を落さずにはい
 られなかつた。が、又或時は理由もないのに、腹ばかり
 立てている事があつた。

暮しのつらいのは勿論だつた。棚ずしの厨子ずしはとうの昔、
 米や青菜に變つていた。今では姫君の桂うちぎや袴はかまも身につ

いている外は残らなかつた。乳母は焚たき物に事を欠けば、立ち腐れになつた寢殿へ、板を剥ぎに出かける位だつた。しかし姫君は昔の通り、琴や歌に気を晴らしながら、じつと男を待ち続けていた。

するとその年の秋の月夜、乳母は姫君の前へ出ると、考え考えこんな事を云つた。

「殿はもう御帰りにはなりますまい。あなた様も殿の事は、お忘れになつては如何でございましょう。就てはこの頃或典てんやく之助のすけが、あなた様にお会わせ申せと、責め立てて居るのでございますが、……」

姫君はその話を聞きながら、六年以前の事を思い出した。六年以前には、いくら泣いても、泣き足りない程悲しかった。が、今は体も心も余りにそれには疲れていた。

「唯静かに老い朽ちたい。」……その外は何も考えなかった。姫君は話を聞き終ると、白い月を眺めたなり、懶ものうげにやつれた顔を振った。

「わたしはもう何も入いらぬ。生きようとも死のうとも一つ事じゃ。……」

* * *

丁度これと同じ時刻、男は遠い常陸ひたちの国の屋形に、新

しい妻と酒を斟くんでいた。妻は父の目がねにかなった、この国の守かみの娘だった。

「あの音は何じや？」

男はふと驚いたように、静かな月明りの軒を見上げた。その時なぜか男の胸には、はつきり姫君の姿が浮んでいた。

「栗の実が落ちたのでございましょう。」

常陸の妻はそう答えながら、ふつつかに銚子の酒をさした。

四

男が京へ歸つたのは、丁度九年目の晩秋だった。男と常陸の妻の族うからと、——彼等は京へはいる途中、日がらの悪いのを避ける為に、三四日粟津あわづに滞在した。それから京へはいる時も、昼の人目に立たないように、わざと日の暮を選ぶ事にした。男は鄙ひなにいる間も、二三度京の妻のもとへ、懇ねんごろな消息をことづけてやった。が、使が歸らなかつたり、幸い歸つて来たと思えば、姫君の屋形がわからなかつたり、一度も返事は手に入らなかつた。

それだけに京へはいったとなると、恋しさも亦ひとしお一層だつた。男は妻の父の屋形へ無事に妻を送りこむが早いか、旅仕度も解かずに六の宮へ行つた。

六の宮へ行つて見ると、昔あつた四足よつあしの門も、檜皮ひわだ葺ぶきの寢殿たいや対たいも、悉ことごとく今はなくなつていた。その中に唯残つているのは、崩れ残りの築土ついでじだけだった。男は草の中に佇んだ儘、茫然と庭の跡を眺めまわした。其処には半ば埋もれた池に、水葱なぎが少し作つてあつた。水葱はかすかな新月の光に、ひっそりと葉を簇むららせていた。

男は政所まんどころと覚おぼしいあたりに、傾いた板屋のあるのを

見つけた。板屋の中には近寄って見ると、誰か人影もあるらしかった。男は闇を透^すかしながら、そつとその人影に声をかけた。すると月明りによるぼい出たのは、何処か見覚えのある老尼だった。

尼は男に名のられると、何も云わずに泣き続けた。その後やっと途切れ途切れに、姫君の身の上を話し出した。

「御見忘れでもございませうが、手前は御内^{みうち}に仕えて居った、はした女^めの母でございます。殿がお下りになつてからも、娘はまだ五年ばかり、御奉公致して居りました。が、その内に夫と共々、但馬^{たじま}へ下る事になりました

から、手前もその節娘と一しよに、御暇おいとまを頂いたのでございます。所がこの頃姫君の事が、何かと心にかかりますので、手前一人京へ上って見ますと、御覧の通り御屋形も何もなくなつて居るのでございませんか？ 姫君も何処へいらつしやつた事やら、——実は手前もさき頃から、途方に暮れて居るのでございます。殿は御存知もございますまいが、娘が御奉公申して居つた間も、姫君のお暮しのおいたわしさは、申しようもない位でございまして。……」

男は一部始終を聞いた後、この腰の曲つた尻に、下の

衣を一枚脱いで渡した。それから頭を垂れた儘、默然と草の中を歩み去った。

五

男は翌日から姫君を探しに、洛中を方々歩きまわった。が、何処へどうしたのか、容易に行き方はわからなかつた。

すると何日か後の夕ぐれ、男はむら雨を避ける為に、朱雀門すざくもんの前にある、西の曲殿きよくでんの軒下に立った。其処に

はまだ男の外にも、物乞いらしい法師が一人、やはり雨止みを待ちわびていた。雨は丹塗りの門の空に、寂しい音を立て続けた。男は法師を尻目にしながら、苛立たしい思いを紛らせたさに、あちこち石畳みを歩いていた。その内にふと男の耳は、薄暗い窓の櫺子の中に、人のいるらしいけはいを捉えた。男は殆何の気なしに、ちらりと窓を覗いて見た。

窓の中には尼が一人、破れた筵をまといながら、病人らしい女を介抱していた。女は夕ぐれの薄明りにも、無気味な程瘦せ枯れているらしかった。しかしその姫君

に違いない事は、一目見ただけでも十分だった。男は声をかけようとした。が、浅ましい姫君の姿を見ると、なぜかその声が出せなかった。姫君は男のいるのも知らず、破れ筵の上に寝反りを打つと、苦しそうにこんな歌を詠よんだ。

「たまぐらのすきまの風もさむかりき、身はならはしのものにざりける。」

男はこの声を聞いた時、思わず姫君の名前を呼んだ。姫君はさすがに枕を起した。が、男を見るが早いか、何かかすかに叫んだきり、又筵の上に俯うつぶ伏してしまった。

尼は、——あの忠実な乳母は、其処へ飛びこんだ男としよに、慌あわてて姫君を抱き起した。しかし抱き起した顔を見ると、乳母は勿論男さえも、一層慌てずにはいられなかつた。

乳母はまるで気の狂つたように、乞食法師のもとへ走り寄つた。そうして、臨終の姫君の為に、何なりとも経を読んでくれと云つた。法師は乳母の望み通り、姫君の枕もとへ座を占めた。が、経文を讀誦どくじゆする代りに、姫君へこう言葉をかけた。

「往生は人手に出来るものではござらぬ。唯御自身怠ら

ずに、阿弥陀仏の御名みなをお唱えなされ。」

姫君は男に抱かれた儘、細ぶつぼそと仏名みょうを唱え出した。と思うと恐しそうに、じつと門の天井を見つめた。

「あれ、あそこに火の燃える車が。……」

「そのような物にお恐れなさるな。御み仏ほとけさえ念ねんずればよ

ろしゅうござる。」

法師はやや声を励ました。すると姫君は少時しばらくの後、又夢うつつのように呟つぶやき出した。

「金色こんじきの蓮華れんげが見えます。天蓋てんがいのように大きい蓮華が。……」

法師は何か云おうとしたが、今度はそれよりもさき、
姫君が切れ切れに口を開いた。

「蓮華はもう見えませぬ。跡には唯暗い中に風ばかり吹
いて居りまする。」

「一心に仏名を御唱えなされ。なぜ一心に御唱えなさら
ぬ？」

法師は殆ど叱るように云った。が、姫君は絶え入りそ
うに、同じ事を繰り返すばかりだった。

「何も、——何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、——
冷たい風ばかり吹いて参りまする。」

男や乳母は涙を呑みながら、口の内に弥陀を念じ続けた。法師も勿論合掌した儘、姫君の念仏を扶たすけていた。そう云う声の雨に交まじる中に、破れ筵を敷いた姫君は、だんだん死に顔に変わって行つた。……

六

それから何日か後の月夜、姫君に念仏を勧めた法師は、やはり朱雀門の前の曲殿に、破やれ衣ごころもの膝を抱えていた。すると其処へ侍が一人、悠々と何か歌いながら、月明り

の大路おおじを歩いて来た。侍は法師の姿を見ると、草履ぞうりの足を止めたなり、さりげないように声をかけた。

「この頃この朱雀門のほとりに、女の泣き声がするそうではないか？」

法師は石畳みに蹲うずくまった儘、たった一言返事をした。

「お聞きなされ。」

侍はちよつと耳を澄ませた。が、かすかな虫の音の外は、何一つ聞えるものもなかった。あたりには唯松の匂が、夜気に漂っているだけだった。侍は口を動かそうとした。しかしまだ何も云わない内に、突然何処からか女

の声が、細そぼそと歎きを送って来た。

侍は太刀に手をかけた。が、声は曲殿の空に、一しきり長い尾を引いた後、だんだん又何処かへ消えて行つた。

「御仏を念じておやりなされ。——」

法師は月光に顔を擡もたげた。

「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑ふ甲が斐いない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」

しかし侍は返事もせず、法師の顔を覗きこんだ。と思うと驚いたように、その前へいきなり両手をついた。

「内記ないきの上しょうにん人ではございませんか？ どうして又この

よくな所に――」

在俗の名は慶滋よししげの保胤やすたね、世に内記の上人と云うのは、
空也くうや上人の弟子の中にも、やん事ない高德の沙門しゃもんだった。

(大正十一年七月)

日本文学電子図書館

六の宮の姫君

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系43 芥川龍之介集
筑摩書房

昭和43年8月25日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館